

嶺井正也先生のご退職にあたって

大曾根 匡
経営学部教授

神田駅の近くの居酒屋に25年ぶりに3人は集まりました。そこで、嶺井先生にいろいろとお話を伺いました。年の瀬のことです。

ダンディなジェントルマン、これが、誰しもが描く嶺井先生の印象でしょう。帽子を斜めにかぶり、トレンチコートの襟を立てて歩く、その格好の良さは、まるで俳優のようです。フランスの個性派俳優ジャン・レノの風貌があります。その嶺井先生と初めて親しくお話をさせていただいたのは、もう25年前のことになります。帰りの教職員バスにたまたま乗り合わせ、嶺井先生と経済学部の矢吹先生と私の3人で飲みに行くことになったのです。それまでは、嶺井先生は教養の教員、大曾根は専門の教員ということで、ほとんど接点はありませんでした。場所は遊園駅近くの小料理屋。そこで教育について語り合い、嶺井先生のお人柄にすっかり魅了されてしまいました。これが嶺井先生と親しくなったきっかけです。

嶺井先生は鹿児島県出身で、小学校教員をされていたお父様の仕事の関係で鹿児島県内を転々と移住されていたようです。屋久島などの離島にもおられたようで、電気やガスなどのインフラも通っていないところで生活されたこともあるようです。嶺井先生の持つ強さと優しさと豪放さは、その大自然の中で育まれたのではないかと思います。

嶺井先生は教育の道に進むべく東京教育大学に進学され、その後、教員養成の専門家として専修大学に入職されました。以来36年間本学で教鞭をとられ、嶺井先生の育てられたゼミ生や自主ゼミ生は350名を超え、教員になった卒業生は多数おり、大学教員も育てられました。その大学教員の一人が前述の矢吹先生です。

嶺井先生と最初に一緒に仕事をさせていただいたのは平成7年ごろで、当時の竹村学部長の主導による「学生による授業評価」プロジェクトでした。その当時は、「学生による授業評価」を行っている大学は全国的にも極めて少なく、専修大学では他学部在先駆けて経営学部で取り組みました。そのプロジェクトにおいて、アンケート項目の設計やアンケート結果の分析などで、教育の専門家である嶺井先生が大きな役割を果たされました。

平成14年から2年間、魚田学部長の学部長補佐として、嶺井先生と一緒に仕事をさせていただ

たことも思い出されます。「老」の魚田、「壮」の嶺井、「青」の大曾根、あるいは、「右」の魚田、「左」の嶺井、「右でも左でも OK」と腰の定まらない大曾根と、今振り返るとバランスの良い執行部だったと思います。3 人の共通点はお酒が好きなところ。大学と中学校との連携イベントや学部長表彰制度の創設などを行いました。大学と中学校との連携イベントでは、嶺井先生のお嬢様にも参加してもらった記憶があります。執行部の勉強会のために山中湖のセミナーハウスで合宿したり、美唄の短大に出張したりする機会もあり、仕事が終わった後、よく飲みにもいきました。嶺井先生は赤ちゃん派で、小さなスナックでママ相手にチビリチビリとお酒を飲むスタイルです。話の面白さとカラオケのうまさはプロ級であり、たまたま居合わせた女性客をいつも虜にしています。その才能は天下一品でした。

もちろん、研究の面でも秀でておられ、日本教職員組合のシンクタンクの国民教育文化総合研究所（現在は、教育文化総合研究所）に設立以来関わられ、1997年から副所長、2003年4月から2014年3月まで10年間所長を務められております。また、教育に関する参考人として下記のように5回も国会に招聘され、意見を述べておられます。

- ① 1985年12月8日：参議院文教・科学委員会「文教・教育職員免許法等の一部改正案について」
- ② 2000年5月9日：参議院文教・科学委員会「国民の祝日に関する法律の一部を改正する法律案について」
- ③ 2006年4月20日：参議院文教・科学委員会「学校教育法等の一部を改正する法律案について」
- ④ 2006年12月6日：参議院静教育基本法に関する特別委員会静岡地方公聴会「教育基本法等の改正について」
- ⑤ 2007年4月26日：衆議院教育再生に関する特別委員会「学校教育法等の一部を改正する法律案等について」

嶺井先生は海外にもよく出張されております。以下が海外出張における嶺井先生の思い出です。

- ① 最初の海外調査で、当時のソ連に渡航するときに乗ったエアフロート機にたまたまキューバの野球選手団が同乗していて、彼らの身体の大きさに驚いた。また、機内食についているフォークやナイフを、彼らの持っていたカストロ首相の写真と無理やり交換させられたことが思い出される。この時の調査旅行で訪れたラトビアの首都リガ郊外にあるナチスドイツの強制収容所跡を視察したが、その悲惨さに胸を打たれた。
- ② 在外研究で1年間滞在したミラノで、マッジョーレ湖に家族で行こうとし、行先の列車を間違えさんざんな目にあつた。ミラノからアテネの日本人学校を視察に行ったとき、時差が1時間あるとは知らずに遅刻をしてしまったことも思い出したくない思い出だ。借りた部屋の家賃が最初は高かったが、9月になったら当時のリラが暴落し、家賃の負担感が減ったことはラッキーだった。
- ③ ゼミ合宿で数回訪れた韓国の忠清大学で、熱烈な歓迎を受け、感激した。

嶺井先生の教育に対する姿勢は、一言でいえば「共生・共学・共育」です。差別や教育の問題を考えるなかで学んだそうです。私の教育が「強育」や「脅育」になっていないかどうか自戒させられます。嶺井先生のゼミのOB・OG会名は「共に会」です。共に生き、共に学び、共に育むという姿勢で学生に接する嶺井先生は、真のジェントルマンです。

最後に、教え子の一人であり、最も近い場所で、最も長きに渡り一緒に過ごされてきた矢吹先生に嶺井先生のお人柄について伺いました。

「嶺井先生は、第一に、マルチ人間であるという印象です。何でもできてしまうのです。教育学の業界では、嶺井先生は有名であり、研究所の所長や2つの学会の会長を務められました。先生が会長の折、私はそのうちの一つの学会の事務局長を務めましたが、大会の企画、学会誌の編集、懇親会の手配、さらには放っておくと弁当の手配まで、ありとあらゆることを一人でやってしまうのです。しかもそれが苦にならない人です。事務局の仲間から、「先生がやると我々の仕事がなくなる」といった冗談めいた苦情が出たほどです。第二に、これと関連しますが、料理、そして家事が大変上手です。料理は、お店を開けるほどです。和洋中、何でもござれです。何度かごちそうになりましたが、抜群でした。そして家事も苦にならないとのことでした。この時間を研究に割いておられたら、さらに著名な先生に成れたのではないかと思います。これも含めて嶺井先生です。第三に、社会的弱者への優しさです。現在、先生は研究会を主宰していますが、我々の業界から外されたような人も、入会が認められています。基本的に誰でもウェルカムです。研究会の仲間から異論がないわけではないのですが、それでも嶺井先生が参加を認めるのだから仕方がないということになります。実は、私も先生の優しさに救われた張本人です。先生がおられなければ、この業界にいらなかったかもしれません。それゆえに、誰もが認めるほどのいい男でもないのに、なぜが女性方に人気があり、モテるのです。火野正平という俳優がいます。現在、BSプレミアムで、彼が視聴者からの手紙をもとに全国を自転車で周るという旅番組があり、一部で人気を博しています。彼は若いころ女たらしで有名でしたが、それでも人気があります。彼の人気は、何気なく発せられる言葉一つ一つに優しさがあり、人気はこれに由来するものと考えています。嶺井先生の中にも似たような面があるように思います。もちろん、火野正平ほど奔放ではありませんが…。先生のルーツが、差別されてきた沖縄にあることに由来するのかもしれません。

以上、思いつくままに私が抱えている嶺井先生の人となりを書かせてもらいました。携帯電話を何本か折られたなど、言えないエピソードもありますが、ここでは、先生の名誉のために控えさせていただきます」というのが、非常勤時代を含め嶺井先生と37年間お付き合いしてきた矢吹先生のお話でした。

思い出話に花を咲かせ、居酒屋での飲み会はお開きとなりました。もう3人で一緒に飲む機会はないかもしれないと思うと一抹の寂しさがこみ上げてきます。そういえば、時を同じくして嶺井先生の奥様も大学を退官されるとのこと。今後は仲睦まじくご家庭で教育談義に花を咲かせることでしょう。

少し雪がちらついてきました。今夜も寒くなりそうです。嶺井先生、長い間ご苦労さまでした。

(2018年1月大雪の日)